
LOOP

司

PDF小説ネット
Byウメ研究所
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

LOOP

【コード】

N1282C

【作者名】

司

【あらすじ】

告白はしたものの、失敗……それで一也の恋路は終了するはずだった。ちよつとSF短編小説。

LOOP

LOOP

「おっ…俺は」

そこは、とある学校の裏での光景。

「…きみの事が…」

完璧に整えてきた。髪も顔も姿も。

「す……………」

心の準備だつて、終えてきた。

「……………す……………」

—也は目前の女の子に告白した。

「好きなんだっ！」

「ずっと…前から」

「好きだった」

「だから…俺と…」

ここまで言葉を紡いだのは、ある種、不正解だった。

だからかもしれない。

「ごめんなさい」

少年は何を想ったのだろう。

少女は何を感じたのだろう。

二人は何を考えたのだろう。

少年はただ立ち尽くし、少女は言葉と共に消え、沈黙の風が訪れた。

現実を受け入れたくないのが、現実だった。

だからだった。

これが夢だと気づいたのは、アラームが鳴った頃。

じりりりりりりりり

「っ」

じりりりりりりりり

うるさいアラームが鳴る中で、俺は飛び起きた。

じりりりりりりりり

夢だった。

じりりりりりりりり

「……………うるせえ」

バゴッ

上部のスイッチを乱暴に叩けば、それは簡単に止まった。

今日告白しようと考えていたのに、朝からいきなりあんな夢を見てしまったら鬱だ。

「なあー也。今日ゲーセン寄ってかねー？」

更に、予定をぶち壊そうとする友人の言葉で鬱+1。

「行かねーよ。元々そんな気分じゃないんだ」

「どうせ暇なんだからお？」

暇。

その一字で済まされてたまるか。

「んな訳ない。俺にだって用事はある」

「…空気読めよ」

「残念ながら俺は」 空気 ”なんて字は読めないんだ」

授業中に馬鹿な話をしながらも、時間は進んでゆくのだ。

「もう放課後…」

朱色の空は輝いている。

それは合図を示す。

俺はある人の元へ向かった。

「か、神前」

「一也くん？」

最初に目を合わせた時から、俺は一目惚れしたのだ。
誰にでも優しくして包容力のある神前に。

だから決めた。

「大事な話があるんだ」

《当たって砕ける》

この言葉をバネに頑張るしかない。

期待はしているが、覚悟も出来ている。

だから告白する。

LOOP

「…神前」

よく考えるべきだったかもしれない。

「うん」

学校の裏で告白なんて、現実味が溢れすぎだ。

「……俺は」

そんなことに後悔したところで遅いけど。

「俺は……」

シミュレートしてくるべきだった。

「……………」

言葉が思いつかない。告白って難しいんだな。

「…どうしたの？」

我に戻る。

そうさ、ありのままに告白すればオーケーだ。

きつとうまくいくはず。

気持ちをぶつけてやる。

「俺は…きみの事が……」

もう踏ん切りは着いた。

「…好きなんだ」

今までの経緯を辿るように、話そうとした。

「……………ごめんなさい」

そんな軽い一言で切り捨てられるとは思ってなかった。

だから彼女が消えても逃避し続けた。

「…正夢だったか」

別に涙なんて出てきやしない。

仮にも一也は男だ。

「そうか…」

だが後悔はしている。

「どこで道を踏み外したんだらうな……」

束の間の、一時の青春。

その時は終わる。

アラームが鳴りだした頃に。

じりりりりりりりり

「……………」

じりりりりりりりり

アラームが鳴ってても、起きれなかった。

じりりりりりりりり

「……………」

じりりりりりりりり

あれも夢だったらしい。

夢の中の又夢。

じりりりりりりりり

「……………」

うるさい物体を投げた。

LOOP

今日、告白をする日のはず。

もう告白する気も失せたのだが、絶対に告白しなければならない。
告白を避けようとしても体が勝手に動くのだ。

失敗の道が無いのは嬉しくても、素直に喜べない。

「なあ一也……って!?!……いつもより痩せてる……?」

「ああ……疲れてるからゲーセンはいらん……」

そして

「ごめんなさい……」

すぐこれだからな。鬱以上の問題だ。

じりりりりりりりり

何回考えたんだろう。

じりりりりりりりり

セリフを変えても無駄だし。

じりりりりりりりり

場所だって変えた。

じりりりりりりりり

「……ああもう!」

どうせ失敗するなら……。

「なあかず……」

「ああ、行ってやるさ。ただし、全部お前の金でやるんだぞ」

「え……えええっ!?!?」

LOOP

…これで運命が変わるなら、この世界を恨む。

「お、もう出てんじゃない。一也、対戦しよーぜ」

「ああ」

いつもなら体が動くはずなのに…。

……まさか？

「うおおっ！な、くっ、この……」

(…それにしても弱いな…)

……まさかな。

「…お前なんでそんな強いんだよ」

「やったことないんだが」

「あつそ……………ん？あれ……」

彼が指さす方向は…。

「…神前？」

神前と、その他の女子が三人。

「何やってんだ？あいつら」

見ていると、四人は…プリクラを撮ろうとしている…？

「……様子がおかしくないか？」

「そうかー？プリクラ撮るだけなんじゃねえの？」

違和感。

神前があの子達と話してる所を見た事がない。

…こいつが肝心の鍵だったとは。

「…ちょっと飲み物買ってくるから、面白そうな台を捜してくれ」

「おう、任せとけ」

LOOP

……金なんかもってきてきてないのに、馬鹿な鍵だ。

耳を澄ます。

「あ……あの……」

「今日も調子ノってたんじゃないのー？ねーえ？」

「そうね。優等生ぶっちゃって……」

「やっぱウザいわー、あんた」

「……」

一瞬で感知した。

これはいじめだと。

だから飛び出した。

「ウザいのは確実にお前らの方だな」

怒りという感情しか残されていない。

本当の意味で腸が煮え繰り返った。

「……一也……くん」

「はあ？何？」

「十人中、十人がお前らをウザいと言うだろう。いや、億・兆の値でもいいが……とりあえずウザい。これでよし」

そして神前の手を取り、走り出した。

無我夢中で走った。

後ろから怒号を放つ輩がいても気にしない。

LOOP

気がついたらゲーセンなんてとっくに出ていて、そこは近くの公園だった。

「はあ…はあ…」
「ベンチ…座るか」

「…ありがとう」

「いや、大した事じゃない」

きみの事を想えばあんなのは楽勝…とは言えなかった。

それより気になったのは…。

「…前からいじめられてたのか？」

「……………」

言つて良いものかどうか。神前は話すのを躊躇ってる様子だ。

「…追求しない方がいい…か。そうだな、そうしよう」

「あ…いえ…あの…」

「気にするなよ、大体わかったから。いつでも助けてやる」

「……………」

正義の味方じゃないんだから…。なんて思われてるだろうか？

まあいい。とりあえず…今はチャンスかもしれない。

が、

「……………え、ええっと……………そ、その……………」

神前の様子がちよっとおかしい。

辺りをきよるきよると見回したり、もじもじと体を動かしたり。

まるで告白する時の俺みたいで…。

「か、一也さん」

「ん？」

その次の言葉を聞いた瞬間、俺は素直に驚けなかった。

「……………すっ……………好きです…！」

むしろ呆けていた。

「ま…前から…ずっと…ずっと…好きでした…！」

「……………ちょ、ちょっとストップ！」

「…え？」

だから気の抜けた質問しか出来なかった。

「こ、これは…こっごく…告白と判断して…宜しいのか？」

「は……………はいっ…………？」

今の神前の返事は肯定なのか、それすらわからない程に俺は動揺していた。

「お…俺…」

あーとかうーとか唸りながら、やっと言えた。

「俺も…………好きだった！」

今度は彼女が驚いて…呆けていた？どっちもか。

神前の話によると、今までずっと俺に告白しようと思ってたらしいが、あの三人に見張られてて怖かった、と。

つまり、あの俺の失敗の数々は…そういう理屈だったって事だ。

それにしても…これは成功なのか？神前の方から告白してきたけど。

LOOP

…どうでもいいか、そんな事。

「うーん…まあ…ありがとう」

「……こちらこそ、ありがとうございます」

こうして俺は、ハッピーエンドを迎えるはずだった。

一也は気づかなかった。

ゲームセンターを抜け出した時からずっと着いてきてた悪友の存在に。

「……これは明日の学校のニュースになるな……ふふふ……一也、おめでとう……お前は今日から男の敵だ……」

だから、遡る。

じりりりりりりりり

「……な……なぜだあああぁっ!?!?」

一也は今日も、ハッピーエンドを探し回る。

広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1282c/>

LOOP

2009年3月24日09時16分発行